

受託研究 国立研究開発法人水産研究・教育機構 古文書目録作成業務

期間：2017年8月4日～2018年3月16日（継続）

〔所員〕 田上 繁 田島佳也

和歌山県下津浦の現地調査（3回目）

越智 信也

和歌山県下津町（現海南市下津町）の現地調査も、今回が3回目となる。今回の調査は、昨年、一昨年の調査で明らかになった現地における資料の残存状況や資料の概要等の情報を踏まえて、資料の原所有者やその関係者に聞き取りを行うことを目的とした。

はじめに訪れた阿弥陀寺は、南北朝期の13世紀前半に創建され、当初は真言宗の寺院だったが、15世紀の文明年間に蓮如がこの地を訪れた際、浄土真宗に改宗したという。下津浦の漁業関係者とのつながりも古くからあったようである。

我々一向が訪れた際、ご住職の奥様である桜井さよ氏に、漁業に関係しておられる方々を集めて



写真1 現在の下津港の様子（2018年1月）



写真2 四十八所神社の鳥居（2018年1月）

いただいたので、下津における漁業の様相を知ることができた。かつては鰯地曳網をはじめさまざまな網漁が行われていたが、近年は小規模なシラス・イカナゴ漁を行っているとのことであった。下津浦漁業組合文書に頻繁に登場し、漁業組合長を長期にわたって務めておられたメ木常吉氏について伺ったところ、そのご子孫に関する情報を得ることができた。大学に戻って改めて調べると、当時の調査資料にその子孫の方の名前を発見できて、大よその来歴が判明するに至った。

さらに四十八所神社を訪れ、神主の宇野邊潤氏にお話を伺うとともに、保管している資料を見せていただくことができた。阿弥陀寺と四十八所神社は古くから漁業従事者とのつながりは深い。四十八所神社は、13世紀後半の資料にすでに見えており、下津浦の住人から船役の徴収を行っていた。また、出漁に際してのお参りや大漁祈願、船玉の魂入れも行っていたようである。

下津町を含めた加茂谷と呼ばれる一帯は、南側に斜面が広がっており、古くからみかん栽培が盛んであった。『南紀徳川史12』という江戸期の資料の「二分口役所控」には、下津浦の生業について「浦少々漁稼致候、みかん之方重に遣候由」と記されている。漁業は主な生業ではなかったようであり、下津がみかんの積み出し港となっていた時期には、海運に携わる人も多かった。そのような条件の中で、長期にわたって漁業組合長を担ったメ木氏は、漁業組合の組織改革を行い、大正初期には共同販売および貸付事業を開始して、漁民の経済的な安定を図ることに成功したことが、同組合文書の資料中にみえる。現地調査の結果、資料の内容理解も進み、資料目録には解題や関連するテーマごとの解説も付して、2018年度刊行に向けて編集を進めている。

■活動データ

2017年度の活動

○下津浦漁業組合文書作成のための来歴調査 2018年1月27日～29日

和歌山県海南市、和歌山県法務局 田島佳也・萬井良大・越智信也、岩田康志・織田洋行（大学院修了生）